後記

學校がはじまつてから、丁度二年になつた。二年の月日をふりかへつてみると長い樣でもあるし、また短かい樣でもある。今の樣に變遷の激しい時期にあつては、五年といへば、一變化を意味する。しかしこの二年に歩いて來た學校の歩はその十年にも十五年にも匹敵するやうに思はれる、學友會もこの機會に「學友會誌」の第一號を出すことが出來た。

谷川先生の論文は去年の創立第一週年記念講演の時の講演筆記であり、園先生と宮坂先生の論文は今年六月の講演會の講演筆記である。何れも丹慶後二氏が中心となつて筆記を整理し清書してくれた。感謝の外はない。金原先生、澁江先生のは先生自ら御執筆下されたもので安心であるが、前の三先生のものは或は聞き誤り書き誤りでもあつて、御講演下された先生方に御迷惑をおかけしはせぬかとひそかに丹慶氏も氣にしてゐられる。

次に會員諸君の論文であるが、事が少し急であつたゝめに、十分に研究的なものを集めることが出來なかつた。藝術一般論では會員諸君の論は必ずしも重きを置きかれるかもしれぬが、しかしそこに滿ちてゐる青年らしい清新な意氣は感ぜられると思ふ。次の號は來年三月に出したいと思つてゐるので、それには一層多くの諸君の論文を得たいと思ふ。特に編輯部員の希ふ處は、吾が國各地の鄕土藝術並びに藝術品の紹介である。各地それ〴〵の地域に、長い傳統を有する藝術品の制作が現に行はれて居る。また各時代のすぐれた遺品があるに相違ない。それが如何にしてはじまり、如何にして作られ、如何にして存するかを、各人それ〴〵の立場からの親切周到なる紹介或は研究を寄せてほしい。藝術一般論では或は未熟を示すにしても、かゝる方面に於いては會員諸君の十分なる成熟を示すことが出來るのではないかと思ふ。次號にはこの點に對してひそかに樂しい期待を持つてゐるのである。

今年は冬のくるのが少しくおそく、やゝ十二月をあたゝかく感ぜしめたが、今朝の霜と氷は突然さゝるやうな激しい寒さを持つて來た。寒さは一方には火の親しみ、燈火の親しみを持つてゐる。間もなく來る冬の休は、この親しみの中で愉快にくらすことゝ思ふ。

最後にこの表紙文字は宮永芳江君の作つたものである。同君の苦心を感謝する。(十二月十四日記)

昭和六年十二月十五日印刷
昭和六年十二月十七日發行 【非賣品】

東京府下武藏野町吉祥寺
帝國美術學校內
編輯兼發行者 金原省吾

東京市小石川區白山御殿町四
印刷人 大居倉之助

東京市小石川區白山御殿町四
印刷所 大文堂印刷所

發行所 帝國美術學校學友會